

伊賀方言の文末詞

佐藤虎男

文末詞については、すでに藤原与一先生によって、しばしば世に示されている。

『国語学』第十一輯「日本語表現法の文末助詞―その成立と生

成―」

『方言研究年報』第一卷一九五八年版など

筆者は、そのお説に導かれて、かねてから三重県を中心とする地域の文末詞の記述を志しているが、前記『年報』の第一巻に寄せたものは、海岸地帯についてであったから、ここには伊賀方言をとりあげて、大略ながら本県の展望に資したいと思う。

さて、文末詞は、文末にあって、その文表現を最終的に決定する

ことばである。したがって、一一の文末詞がどのような決定性を発揮しているかに、観察の視点をすえるべきこととなる。

△調査地 三重県阿山郡大山田村奥馬野および中馬野

伊勢・伊賀の国境を南北に走る鈴鹿山脈の一峰、笠取山の西

ふもとにある。半農半林の部落である。

△調査日程 昭和三十三年八月二〇日―二十四日（五日間）

△資料 被調査者の選定にあたっては、資料の純粋性を期しうるより注意した。結果は、老年層・女性層にあつく、青年層・男性層にうすくなった。

なお、奥馬野と中馬野は、部落こそちがいが、ごく近い位置にあり、一団の言語状態をなしていると認められるので、一括して扱った。

当方言文末詞を、一定の形態的処理のもとで、上述の視点について観察記述するならば、おおよそつぎのようになる。

第一類 単純感声の文末詞

〔ナ〕

全文末詞中、頻度のもっとも高いものである。以下いくつかの用法を示す。まず、

(1) ○エー コト ヌワシャル ナー。 (老女) △ラジオの宗教

講話はV

というような「ナー」がある。表現全体が、いかにも筆者に共感を誘うような発言であった。そういう文表現に決定したのは、文末詞「ナー」である。相手とともにものを思おうとする生活習慣の一面が、ここにかがわれよう。藤原先生によれば、この種のものである共同把握の「ナー」という。相手の発言に同感していう「ソーデスナー」などの「ナー」も、この種に属しよう。長呼となりやすい。

(2) ○ムカシワ 「オトー オカー」 ヤッタ ナ。 (初老女→老女)

△その昔の「父・母」の呼称について。隣人に確かめることで筆者への答としたV

の「ナ」は、確かめの表現としてこの文を決定するのに役だっている。確かめの「ナ」である。「ナ」と短くはねあがる声調が、この場合ふさわしい。この種のものは、一般に短呼となりやすい。

この「ナ」を、(1)のものと対置してみると、用法上(1)にすぐ隣りあわせていることが知られる。原本的用法などというものは容易にいないが、かりに用法の拡張ということをいえば、こういう拡張

分化の関係には必然性があるように思う。

なお、この確かめの「ナ」には、たとえば

○ココナ。ここですか。(少女)

のような、いわゆる問いの「ナ」が隣接するようにも思われるが、このような「ナ」も、実は決して単純な問いではなく、多分に確かめめであることを認めねばならない。

(3) ○フジノ ハナ サク コロガ イチバン ヨロシー ナ。

(青女) △川魚アメゴの魚獲期についてV

のような「ナ」には、相手の知らないことを適確に伝え達しようとする言語態度が認められる。

(4) ○イッテハンバイニ イエマセン ナー。そう一概にいえませんがねえ。(初老男) △筆者の発言を否定するようにV

の「ナー」も同じ趣のものと見られるが、前例にくらべると、相手の近接性・親近性に乏しい。

一体、相手への近接性・親近性といえば、対話表現である限りは、その強弱の度合をもつて、全文末詞を検討することができる。またしなければならぬものであろう。今、「ナ」一つをとって

も、上述(1)・(2)のごとき、近接性の強いものから、本項(4)のごとき、その乏しいもの、さらに以下述べる自問・詠嘆など、そのもっと乏しいものに至るまで、さまざまな度合に生きている。

(5) ○イッチャズケ ナー。アリア シマス。一夜漬ですねえ。あれはここでもしますよ。(老女) △名を出さずに内容を説明して、「こういうものを作るか」と問うたのに答えてV

のような「ナー」は、相手の発言をひきとりつつ、ためらいがちに考えこむもので、いわば自問の「ナ」である。明日の天気を問われ

て、「お天気ねえ。それですねえ。」などというのと同様である。

○イマ ナゴヤイ イテオデルノヤガ アリヤ ナンヤラ

ユータ ナー。今名古屋へ行っておいだが、あの人、さ

あて何とかいいましたねえ。(初老女)

も、考えこむ趣のものであった。つぎに、

(6) ○ヤラカイ アンシャ カナン ナー。柔い足は閉口だねえ。

(初老女 ↓ 息子) 八孫が足に怪我したのを見て、

は、傍にいる息子にいかけるがごとく、しかも多分に詠嘆ぎみの
発言であった。そういうなげきの表現は、文末詞に収約的である。

「ナ」の用法を類型化すれば、おおよそ以上のようになるかと思
うが、このうちでは、(1)・(2)・(3)・(4)のおこなわれることが著し
い。

待遇価はどうであらう。待遇価とは、要するに鄭重さの度合であ
る。それは本来、一つの文末詞についても、文表現ごとに個別のも
のであるが、歴史的現実としては、一文末詞は、おのずからそれ相
当の敬卑待遇感情の個性化を招いている。これを待遇価とも品位と
もよぶのである。個々の文末詞が、このように社会習慣化された一
定の待遇価をになう以上、発言にあたっては、相手に対する待遇感
情の表示ともなるわけである。

さて、「ナ」の待遇価は、一般に中程度以上のものである。つま
り「ナ」は、相手を中程度以上に待遇する感情の認められる文末詞
である。

つぎに、「ナ」の複合形について見る。複合形には、「ゾナ」・
「ドナ」・「カナ」・「ンナ」(↑ニナ)・「ガナ」・「ワナ」など
がある。「ナ」のはたらしきの活潑さを、ここにもうけとることがで

きる。

ここに複合というのは、その複合体が、まさに一体感をもつもの
に限り、たとえば、

○ワケテ タベルテ イーマス ワシテナー。(老女)

の「ワシテナー」のような、二つの文末詞のたたみかけ(この例で
は「ワシテ」と「ナー」と認められるもの、二個に遊離している
と認められるものはこれを除く。

まず、

○ンナー、ワケモナイ コド ユワヘン ゾナ。 そんなあな

た、むちゃなことを私はいはしませんのよ。(老女)

の「ゾナ」は、強い一方的なちかけ詞である。その「ゾナ」の
「ナ」を打診してみるのに、これは、先にみた単独形諸用法のうち
の(1)ないし(3)(4)にあたるものと思われる。この「ナ」が、強い調子
の「ゾ」の荒さをやわらげているとも見られる。待遇価は「ナ」的
なものである。

○ヤー、ケツネヤ(狐が) トリツイタタラ ユイマス ドナ。

(老女)

の「ドナ」は、前項「ゾナ」に準じるが、待遇価はやや低い。

また、単独形「ナ」の(1)あるいは(3)のような「ナ」が、転成文末
詞「ニ」と複合して、つぎのような「ンナ」をつくる。

○サイヤンナ。 そうなんですすよ。(老女)

○タ、エーカエ ユーハン イッパダス シナ。(米食は)大

概夕飯一飯だけなんですすよ。(老女)

この場合の「ナ」は、「ニ」のもちかけ性を補うかのようなはた
らしきをしている。「ンナ」となっではじめて、よく相手にとどけえ

たのである。彼遇価は中くらいという。

○コク コラ ウチニ イル ヒート アラシマセンダ ガナ。

(老女)

の「ガナ」は、適度の待遇価をもった、ややふくみのある訴えかけ
になっている(転成文末詞「ガ」の項参照)。

つぎに「ワナ」の例。

○ウマノ アシ アロタンデ タライブチテ ユーテマス ワ

ナ。馬の足を洗ったので、そこをたらい淵といっています

よね。(中男)△笠取山中の遺跡▽

○オケノ フロ イッテンノ アエマヤ ワナ。 昔式の桶風呂

を使っている家はまれですわよ。(老女)

「ワ」が、話者がわのものをかなり遠慮がちにもちかける、内
攻性の訴えであるからには、「ワナ」となって、いくぶんの外攻性
をうることもなる道理であろうか。そういう理解を可能にする複
合である。待遇価は、「ワ」単独形よりやや低いようである。

最後に「カナ」。

○オバチヤン。タキマシヨ カナ。 おばさん。焚きましようか、

どうしましようか。(初老女↓入浴中の年長の女)

のような「カナ」には、問うて「確かめ」る気持が揺曳する。単独
形「ナ」の「確かめ」の用法が、その品位とともにここにはどよく
生かされている。

「カナ」はまた、反ばくのものいいにもなる。その場合は、「……
カ」の裸のままの強さをやわらけてもちかけるはたらきをして
いると見られる。

以上の「ナ」属複合形を通覧するのに、つぎのようなことがいえ

るかと思う。

1 すべて複合の事実は、文末詞に託する文表現上の要請の多様さ
にもとづくものと考えられるが、「ナ」属複合形にあっては、
単独形諸用法のうち(1)・(4)によく生かされており、かつそれ
らに上接文末詞の機能調節の役割をはたしている。

2 複合形にあらわれた「ナ」の形は、多くが短呼の「ナ」であ
り、かつ、一般に高音隆起しない傾向にある。

3 待遇価は、上接文末詞のそれとのかねあいとなるが、一般に
「ナ」的な待遇価を保持しがちである。

〔C〕

「ナ」にくらべるとき、まずその待遇価のちがいが指摘される。
「ノ」の待遇価は概して低い。それは、「マス」「ダス」などのて
いねい語に続きにくいこと、使用の位層が主として男子(及び老年
女性)であること、村人間の対話にあらわれやすいことと無関係で
はない。

つぎに用法についても、左の二類を聞きえたにとどまる。

○ムカシカラノ モノア アリヤコソ アレ ノー。 昔からの
物があればこそねえ。こうして幸せなんですよ。(老女)

△家に山林がある▽

は、共感を求めるような共同把握の「ノ」で見られる。

○マエア ヲッタ ノー。 イッカイ。 以前にあったねえ。一回だ
け。(少年↓同)

これは確かめの「ノ」である。

右の二類にとどまるのは寡聞のゆえであらう。複合形もえていな
い。ただ、右の二類が「ナ」の主用法に対応するものであることは

注意してよい。広さの点では「ナ」に及ばないが、基本的には同似のものを見る。

〔ヤ〕

用法を検するのに、三類ほどにまとめてみることができようである。まず、

○サキヤ。(老女・孫)△サギは名▽

のような呼びかけ用の「ヤ」、これの待遇価は低い。年少者によびかける場合が多いという。

○マタキヤ。またおいでよね。(幼女・隣家の中女)

は、命令の文にはたらく、うながしの「ヤ」である。待遇価は前例ほどに悪くない。

○コレキヤンヤ。これ着なさいや。(息子↓老女・母)

ともあった。

○チニオヤ。何をかい。(初老女↓中女)

は問いの「ヤ」である。待遇価は低い。

〔ヨ〕

「ヨ」には、頼みの「ヨ」のほかに、

○キョービオマンヨ。このごろはあなた。(老女)

のような呼びかけをしめくる「ヨ」が聞かれる。待遇価は概して中位を出ない。

第二类 准感声的文末詞

〔サ〕

まず、

○サイヤサ。そりですとも。(老女)

のような「サ」。これには、相手への親近性がうすく、話者の立場

をそのままに、むしろ相手の心をよびさまして伝える作用がある。

○イーエサ。ナンノオアイソモゴザイマセンデシタ。

(老女)

も、作用性は似たものであるが、断定気分のうかがえる「サ」である。応答の「イーエ」にかかわっている点に興味がある。

また、

○コレミサー。これ見なさいよ。(初老女↓幼女)

○モツテコイサ。(少年↓同)

では、命令の表現にあらわれている点に注意される。これもまた、相手の注意を喚起するという作用性に生きている。

待遇価は比較的高いものであり、頻用される文末詞である。

複合形に「カサ」「ワサ」があり、「カサ」は、

○ナンニモアリマシヨカサ。(老女)

のように、いわゆる反ばくの表現となるが、むき出しのままの「……カ」反ばく表現に、かなりの待遇価をもたらず。「ワサ」は、

○エーカケンナザイサンノウチヤッタヨロイヤカブト

ガアリマスワサ。相当な財産の家なら鎧や兜がありま
すよ。(中男)

のように、教示すものいいとなる。待遇価は中等程度のものである。

以上の観察にしたがえば、「サ」の機能の中核は注意喚起にあるといえよう。

〔ゾ〕

○ゴーズ(上津)イイクトオモシライゾ。(青女↓同)

のような「ゾ」がまずあげられる。自説強調の表現となる。相手へ

のこまやかな思入れに乏しい。説論の表現ともなりやすい。

○オーカタ ハチジ ヌーニ ナロゾ。かれこれ八十才になろうよ、きつと。(老女)

は、古風な感じのものでいいで、推量形述部を受けている点に注意される。

○アケミ ヤー。エンビツ ドーシタ ズ。(初老女↓孫)は、問いの表現にあらわれ、強く答えを求める気持がある。

待遇価は一般に中等以下である。
なお、

○ソソナ コト ヌータラ アカンノヤ ゾエー。(初老女↓孫)の「ゾエー」は、複合形(例えば「ゾ・エー」)か、「ゾ」の異形

か。また、
○ハラ アコルカッタヤ ジヨ。腹は赤かつたんだぞ。(少年

↓同)△あほう鳥の色↓
のような「ジヨ」は、「ゾヨ」からのものと思われる。これは品が

よくない。
機能は「ゾ」的なものであるが、待遇価は「ゾ」より低い。

○ヨーデッド。よく出るぞ。(少年)△猪の話↓

○モイ コレカラン ナルト ウント シケル デー。(青女)

△台風の時期↓

これは「ド」よりも相手への迫りが弱く、また待遇価もいくらかよい。自説強調というほど強いものでない、口説きの作用がある。

第三類 原生単純形文末詞

「カ」にもさまざまの用法が認められる。

○フツノ チューシャヨリ イタイカ。(少年↓同)のような単純な問いの「カ」。

○ニヤクネングライ タッテツツヤロカ。マツト タッテツツヤロカ。(老女)△この家は↓

のような自問調の「カ」。
○ア、サヨカ。ア。ソイカ。ソイカ。(老女)

のような自得の「カ」。
○サー、オレモイノカ。(少年)

のような独白ぎみの「カ」などである。
「カ」の機能の基調は「問い」であろう。これが具体的な文に顕現して、自問とか自得とかいう個性を生むのである。

第四類 転成文末詞

一 助詞系
格助詞「ノ」からの転成といわれる。

○コニュー ノキダライ ズット ホスノ。こういふ軒下へずつと干すのよ。(老女)△漬物用の大根を干す↓

「ノヤ」的な断定の気分が、品よくうち出されている。「シ」となることがある。

○ソヤッテ イチイチ アルイテ オクレマスノ。(老女)

△筆者の仕事に理解を示して↓

では、問いにはたらいっている。
[ガ]

接続助詞「ガ」からの転成かと推定されるものである。

○カワイイ コヤ ガー。(初老女↓中女) △新聞の写真を見

てV

○イマ オモシテカロガ。今聞いたらおもしろいでしょう、

ね? (老女↓少年) △昔話V

のようにいう。「ねえ、そうじゃないの」という余意が言外にた

より。そういうふくみを綴すところに、転成の事実を考えやすい

わけである。

〔三〕 これも接続助詞の、「ノニ」ないし「ニ」からの転成かと思われ

る。 ○ミンナー オトシヨリワ コノダイシヨニ ウマレタ シト

バツカデスニ。(老女)

のようにいう。「御存知ないようだけれど、事実をいえばこうなん

です」というふくみをもった、助言・告知の「ニ」であり、ま

た ○「エーカ ミヨ ニ」テ ヌイモツテ サナー。 「映画見よ

うよ」といいながらですね。(初老女↓青男)

では、意志形述部をうけて勧誘にはたらいている。

この「ニ」が、ナ行文末詞を下接複合するときは、「ン」となる

(例えば「シナ」)ことが多い。概して上品なものいである。

〔デ〕 ○アコラワ シゴト シテラー デ。 あそこらは仕事をしてま

すとも、きつと。(初老女↓老女)

○ナンヤ、コレ。ピンボケ シテラー デ。 なんだい、これ

は。ピンボケしてるじゃないか。(中男↓妻)

転成をいうのは、もと「しておらいで」式のものであったかと推

定され、しかも現用には、文末「デ」の遊離独立のさまが認められ

るからである。ただ、上接部分の構造が旧態を保ち、「デ」がどん

な構造をもうけるといふ自在性をもっていない点には注意しなけれ

ばならない。待遇価はよくない。

二、助動詞系

〔ヤワ〕 ○ポーシ ノグ ヤワ。 帽子ぬいだらどうなの。早くぬぎな

さい。(老女↓孫) △雨にぬれて帰宅した孫を迎えてV

「ワ」を下接しやすく、「ヤワ」の形しかえていないが、「ヤ

ワ」単独形もありうるだろうと思う。年少者にさすように指示する場

合に用いられる。ただの命令ではなく、相手の自主性を誘い出

すように教えるのである。「ヤ」の出自は断定の助動詞であろう。

志摩で、 ○イカシタイ ジャー。 生かしてやりなさいよ。(青女↓同)

△採った魚をV

というが、その「生かしてやるジャー」の「ジャー」を思ひよそえ

てみることが出来る。待遇価は中程度である。

〔シナラー〕 出自は「ノナラ」(ナラは断定の助動詞)であろう。

○イヌ シナラー。 帰るんか。(少年↓同)

下品粗野な問いである。

〔マイカ〕

○コーノル エンネンニナツテマスノヤロ マイカ。 こうい

う因縁になってますのでしようよ、きつと。(老女)

推量の助動詞「マイ」が、推量形の述部「……ヤロ」をうけるようになつて、文末詞化がおこるわけである。そして「カ」を下接して固定した。そこに、訳文に示したように、「きつとそうですよ」の気分が生み出される。待遇価は中程度である。

三、動詞系

ここにとりあげる「シテ」は、よく当地文末詞の特色を示すもので、頻度も高い。

その出自を、たとえば「それからして」などというときの「して」と想定しうるとすれば、これは接続助詞系ないし、「し」の動詞性から動詞系と見られる(藤原先生の御教示による)。

まず「シテ」単独形について見る。

○ホヤ シテー。 そうですよ。(初老女↓孫)

○アヤテ センダク シマスノヤ シテ。 ああやつて(洗濯機)で洗濯しますよ。(老女)

のように、上接部分が「……ヤ」(断定の助動詞)である場合が多いが、

○ア。 ウマイコト カクヨ ナツタ シテ。 あら。 上手にかくようになつたわよ。(初老女↓息子)△孫の絵を見て▽

○センド タコ トラレテー。 カナン シテ。 たびたび高く買わされて。 閉口だよ。(青男↓同)

のようにもあつて、つまるところ、終止形述部をうけるのである。

つぎに複合形について見る。

○オマンガ、ヨソノヤサケ ホットケ サシテ。 あんたが(口

を出さなくっていいんだよ)よそのだからほつときなよ。

(老女↓子供)

のような「サシテ」は、年寄りが使ふとのことであつた。また、

○チ。 ニーガッコーワ イチバン シタデス ニシテ。(初老女)

△地勢展望▽

のような「ニシテ」がある。しかし、複合形でもっとも盛んなのは、

○コレ イレヤナ アカン ワシテ。 これ入れなくちや駄目だよ。(中男↓幼女)△玩具の散乱を注意して▽

のような「ワシテ」である。

単独、複合を通して見るのに、「シテ」は、無条件にうけ入れられるであらうことがらを、疑いなく相手にもちかける作用をしていると受けとられる。待遇価はかなり高いものである。

「シテ」に関連して、ここにつきのような「テ」をとりあげよ

う。その出自を同じくするとは断じがたいものである(藤原先生による)が、作用性は「シテ」に類似している。

○オミヨコーノ イシャ タツテマスノヤ テ。 お名号の石が建っているのですよ。(老男)△笠取山中の遺蹟▽

いわゆる伝聞的なものいいではなく、自身の目で見た遺蹟を語つて聞かせてくれたのであつた。

○アサ。 ウツタヤ テ。 朝うちとつたんだよ。(少年)△猪狩りの話▽

もまたそうである。

因みに、かつて、同じ伊賀の南部、名張なばらでのこと、行きずりの一中年婦人に「あなたは名張のお方ですか」と問うたことがある。そ

の答えに、

○ア、ソードスネン テー。 ああそうですのよ。

とあった。伝聞の「テ」に親しんでいる耳には異様に聞えたものである。名張ではこの「テ」が、その複合形「ワテ」とともに頻用されている。

四、名詞系

〔モノ〕

○ケール モノ。 コリヤ。 だつて消えるんだもの、これは。

(初老女)

今や、終止形述部をうけていると見てよいものとなっている。弁解ぎみの表現となる。

五、代名詞系

〔ワ〕

代名詞「ワレ」の転成といわれる。用例を検討するのに、なるほどそうでもあらうと思われる。よく用いられる文末詞である。

○アシタ カベ タタイタラ モシトツ カナン ワ。 明日壁

をたたき落したらもう一つ開口だよ。(初老男↓中女) 隣家が家のとりこわしをしている↓

○マタ エタノモシーシマスワ。 またお願いしますわ。(老女

↓行商人)

「ワ」の機能上の特色は、内攻性の訴えにある。その、訴えのひかえめなところに、出自「ワレ」を思いみるのである。待遇価は中程度といえよう。

六、その他

つぎのような「セ」は転成文末詞であらうか。かりにそうだとし

てここに掲げるが、出自は不明である。

○ソツチャ イケ チューノヤセ。 イケー。(老女↓孫)

「ソツちへ行けというのに」という意味だとのことであったが、この注釈は、「セ」を考えてのものかどうか疑わしい。ただこの一例しか聞いていないが、こういう「セ」は時々使うとのことであった。

三

以上は、文末決定性に焦点をあわせて文末詞を観察し、類型的記述を試みたものである。われわれは、このような作業の過程の中に、文末詞による文表現決定とは、既に指摘されているように、その文表現をどのような言語態度のものとするかの決定であり、そのことは同時に、相手への待遇感情の表現の決定であるということを知る。一般に、文末に、たとえば「ナー」と出れば、その文表現全体が、「ナー」的な対話上の言語態度によって貫かれていると見られる。この意味で、多様な文末詞の認識は、そのまま多様な文表現の認識にはかならない。

ひるがえって思うのに、具体的な対話では、たとえば、

○ウシノ ヒーワ ナー。 ホネノ ナイ モノテ ナー。 タニシ

ヤタラ カワニヤタラ ヌー ヤツワ ナー。 タベマシタ

ワ。(老女)

のように、特定の文末詞によって、短いセンテンスに区切り区切り、連文を形成することが多い。文末詞は、このように、いわゆる主述の呼応を越えてはたらしきもする。それは、基本的には、「対話」のもつ必然的な要請にもとづくのであらう。それにしても、文

末詞が、どういふ構造のものをうけるかを、一一の文末詞について検討することが、ここに必要であらう。文末に孤立してはたらく文末詞(安田喜代門氏『国語法概説』では「孤立助詞」といっている)であつてみれば、原則的には、どんな構造のものをもうけると

解せられるが、現用を検討すれば、文末詞とその上部構造との関係に何らかの制約が見出されるはずと思ふ。ことに転成の文末詞などは、一般にそれが大きいようである。(24・10・20)

(広島県立広島国泰寺高校)